

---

# 白黒逃避行

空波四季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白黒逃避行

### 【Nコード】

N1649Z

### 【作者名】

空波四季

### 【あらすじ】

村を追われた主人公が森で妖精と出会う、ボーイミーツガールな話。作者が不真面目なので更新は不定期です。

## 君と出逢った日（前書き）

初投稿です。更新は不定期になると思いますがよろしくお願いします。

## 君と出逢った日

俺は今森の中を走っている。樹は空を覆わんが如く茂り、もはや晴れているのか曇っているのか定かではない。森の中は薄暗くジメジメしていて、体からキノコが生えそうだ。そんな森の中を俺は枝が皮膚をかなぐるのも厭わずがむしやりに走り続けている。

「ハア、ここまでくれば、ハア、大丈夫、だろ……。」  
そういつて踏み出した先で唐突に地面が消えた。正確にはそこは崖になっていた。

「ああああああああ!!」  
俺は落下した…………。

…体の節々が悲鳴をあげている。さっきの落下のせいで体のあちこちをぶつけたからだ。幸い大きな怪我をしておらず、気も失っていないかった。

「…あー、いてえ。それにだせえ。…しかし此处はどこだ？」

俺は軋む体を煩わしく思いながらも立ち上がった。周りには草はぼうぼうと生えており、更に茶色で視界が埋まるほど樹木が群生している。

俺が落ちてきた崖は遙か上にあり、上に登るのは難しそうだ。構造としては、巨木の上を崖が覆っているという感じだろうか。きつと の逆向きみたいな形をしているんだろう。

とりあえずこのまま呆けていても埒が明かないのでとにかく歩いていく。幸い此処なら追っ手の心配はいらなさそうなので焦る必要もない。

「しかし、ホントに此処は何処なんだ？」

俺は思考を巡らす。

だが全くわからず、諦める。それに今は此処から出る方が先だ。こんなところにいたら食べるもの飲むものもなく餓死してしまいそうだ。

そう思い、俺は黙々と歩を進める。

10分程歩いただろうか、何やら前方で音がする。…獣だろうか。だとしたら………ついている。

音は次第と大きくなり、一際大きな音がしたと思ったら、ニメートル弱の熊が襲い掛かってきた。

「ヴオオオオオオオオオオ!!」

猛々しい唸り声をあげ、俺をその大きく鋭い爪で切り裂こうとする。

しかしその爪は俺を切り裂くことはなく、熊は驚きの表情を見せる。

なぜなら俺が熊の爪を指から伸びた黒く長い爪で受け止めたからだ。

長さは恐らく九十センチメートル程度。

その薄さとは裏腹に強靱な硬さと耐久力を兼ね備え、更に鋭くなっている。

「相手が悪かったな。悪いが死んで俺の夕飯になってくれ。」

俺はその爪で切り裂き、最後に心臓を一突きにして熊を殺した。おれが生きていくために。

殺した熊を引きずりながら更に奥へと進む。割と重いが、まあたいしたことはない。しかし…

「食糧は確保したけど水がないな。どっかに川とかねえかな。」

動物がいたんだから水もあるだろうが、だからといって簡単に見つかるかといったら話は別だ。

「ハア、自力で見つけ出すしかないよな。」

溜息が一つこぼれる。ああ、憂鬱だ。

それにさっき熊を殺した時に浴びた返り血で服が血生臭いことも俺をさらに憂鬱にさせる。泣きっ面に蜂とはこのことか。

そんな思考を巡らせていると、どこかで水滴が跳ねる音が聞こえた……気がする。予感かもしれない。

何かに引き寄せられるように俺はその方へ足を向けふらふらと歩を進めていく。

歩くごとに周りの木々が減ってきて徐々に視界が晴れてきた。草も背丈が低くなり、歩きやすくなってきた。

その先に見えたのは……………

「……………綺麗だ。」

そこで俺が見たものは、大きく澄んだ泉とその泉の真ん中で跪く天使のような少女の姿だった。



## 弁明（前書き）

調子乗って書いたらなんか書けた。でも内容はあんまない。

## 弁明

そこにいた少女は本当に美しい少女だった。透き通るような白い肌をしており、まるで水晶のようだ。さらに体の線は細いが女性的な質感のある四肢。実に均整が取れている。顔は小さく少し大人びた顔付きで、可愛いというよりは美人といった感じた。目はキツすぎず、しかしおっとりとした感じでもなく、このあたりが大人っぽさを醸し出しているのだろう。さらにこれと長い睫毛が相俟ってどことない儚さを漂わせている。

しかし最も特徴的なのは、腰まで届いている透明感のあるライトグリーン<sup>①</sup>の髪だ。艶があり、どこからか洩れ出している光りを反射して輝いている。

よく見れば目も同じ色をしている。

彼女の姿は神秘的で神々しささえ感じる。そう、まるで人間ではないような……………。

彼女のあまりの美しさに俺が見惚れていると、彼女はこちらに気付いたようだ。最初は驚いたような顔をしていたが、直ぐに眉根を寄せてこちらを睨んできた。

「…あなた誰？一体どこから入ってきたの？それに、……その熊はなに？あなた、人間じゃないの？」

嫌悪感が多分に含まれていたこの言葉が胸に刺さり、俺は正気に戻った。

「あー、えっと、怪しいものじゃない。たまたま落ちて歩いて来たら此処についたんだ。それとこの熊は襲い掛かってきたから殺したんだ。食べ物もなかったし。…あと俺はとりあえず、人間、…だと思っ。」

「嘘っ！だってここには結界が張ってあるもの。人間が入って来られるわけない！あとどうやったら人間が熊を素手で殺せるっていうの！」

「…よく素手だってわかったな。」

「わかるわよそれぐらい。見たところ武器だって持ってなさそうだし。」

「銃で撃ち殺したかもしれないだろ？」

「……“じゅう”ってなに？」

「……。いや、知らないならいいんだ。」

ちなみにこの世界で銃は一般的なものである。城の衛兵なんかは必ず所持している。

「なにはどうあれ、結局素手で殺したんでしょ？」

「まあ、な。」

「じゃあ例えあなたが人間だったとして、熊を素手で殺して結界を通り抜けてくるような輩を警戒するなってほうが無理だと思わない？」

「……御尤もです。」

正しいのは彼女だった。そりゃそうだ。俺だって今の俺みたいな奴が突然現れたら警戒するどころか縄で縛り上げて取調べを行うだろう。それを思えば彼女の態度は慈悲深いものだろう。

しかしこのままではまずいのでなんとか警戒を解いてもらわないといけない。

……どうしたらいいだろう。何か名案はないだろうか。

そうだ、一か八か……

「俺は君に危害を加えるつもりはない。」

「だから……」

「その証拠に！……俺の秘密を、姿を見せる。」

「……………え？」

## 弁明（後書き）

果してその正体とは！？

… きっと次回はそれだけです。

俺の正体（前書き）

前の予告通りです。

## 俺の正体

「あなたの正体って……、それは気になるけど。でもっ！別にそれを明かされたからって信用すると思うの？」

こう返して来ることはだいたい予測はついている。しかし、俺にはこうすることしか出来ない。他にも手段があるのかもしれないが、生憎と俺には大した教養もないので思いつかない。だから、俺は話しつづける。

「いいから聞いてくれ。俺はこの秘密のせいで何時も酷い目にあった。この秘密をあんたがばらしたら俺は直ぐに此処から逃げないといけなくなる。捕まったらたぶん極刑だろう。」

「……いいわ、話してみて。」

どうやら少しは信用されたようだ。



「ありがとう。まず俺の名前はヴォイド・クルータス。俺は小さな村で生まれた。生まれは普通なんだ。でも俺は、生まれた頃から他の人間とは違った。決定的にな。まず見ての通り髪も目も真っ黒だ。」

そういつて俺は自分の髪と目を指差した。

「しかしまあ、なかにはこんな奴もいるらしい。俺のいた村の村長が見たことがあるっていつてたらしい。俺は見たことないけどな。でもそんなことは些細なことだ。これから見せるものに比べればな。」

俺はそういつて着ている服を脱ぎだして上裸になる。別に露出したかったからとかじゃない。

しかし彼女は予想外だったらしい。慌てて目を覆う。

「ちょっと！？ななななんで服脱ぎ出してるの！？な、ナニを見せる気！？」

とか言いつつ顔を隠している両の手指の隙間から真っ赤な顔が覗いているのは気のせいだろうか。

「落ち着いてくれ、これ以上は脱がない。…いいか？俺の背中を見てくれ。」

俺は彼女に背を向けそうだった。

「……なに、これ。」

当然の反応だろう。なんせ俺の背中には黒く小さな羽が生えているのだから。サイズは成人男性の手の平くらいで約20センチメートルだ。自分で言うのもなんだが、なかなか毛はふさふさしていて気持ちいい。この羽は大きさを変えることが出来、普段はこのサイズにしているが、最大で3メートルほどになる。ちなみに何故落ちたときにの羽で飛ばなかったのかと聞かれたら、それは樹が邪魔で飛べなかったからだ。

ということであつとした悪戯心も手伝つて、羽を最大まで広げてみた。

「ひゃあっ！？えっ、大きくなつた！？」

こっちから仕掛けていてなんだが思った以上に可愛い声で驚いたの  
で、俺はシリ阿斯な話しをしているはずなのに可笑しくなってクス  
クスと笑ってしまった。

「なに？なんで笑ってるの？」

よくわかってない彼女は不思議そうにこちらを見てくる。

「いや、思ったよりも可愛い声だったからちょっと可笑しくつて。」

すると彼女は顔を真っ赤にして怒りの形相で睨みつけてきた。

「それって私に可愛くないって言ってるの？」

「そんなことは言っていない。アンタって美人で大人っぽいし、ちょ  
っと意外だなんて思っている。」

すると今度も顔を真っ赤にしたが、さっきの怒っている表情とは違  
って照れたような表情を浮かべている。

思わず抱きしめたくなる衝動を理性を総動員して抑える。

「それと、ほら。」

俺は自分の爪を伸ばして彼女に見せる。

「……これって爪？触ってもいい？」

「そりゃ構わないけど……。」

俺が言い終える前に彼女は恐る恐る俺の爪に触れてきた。

「黒くて長くて、…硬いのね。……ねえ、羽にも触っていい？」

「筆ったりしないならどうぞ。」

すると彼女は心外だと言わんばかりに顔をしかめた。

「失礼ね、そんなことしないわよ。」



「……………」。

彼女は黙ったままにも言わない。その心中は定かではないが、表情は少し曇っている。

「これが俺の正体だ。」

## 俺の正体（後書き）

次は彼女の正体が明らかに！とかになると思います。

## 彼女の正体 其の一（前書き）

思っんですけど他の作家さんはよくあんなに長い文章が書けますよね。慣れでしょうか、それとも根気の差でしょうか。



## 彼女の正体 其の一

「……………」

「……………」

二人の間には重たい空気が漂っている。彼女は俺が話したきり黙ったままだ。二人の間に会話がなせいで鳥の囀りがやけにはっきり聞こえる。

これと言ったのは失敗だったかと思いはじめて何とか場を和ませようと言葉を紡ごうとしたとき、

「……………わかった。私はあなたを、ヴォイド・クルータスを信じる。」

彼女は微笑みながら応えてくれた。

「ありがとう!-!」

何とか信用してもらえたようだ。俺はホッと胸を撫で下ろす。

「それで早速で悪いんだが水場かどこかに案内してもらえないか？  
体が血生臭くつてな。その泉は駄目なんだろう？」

「ええ、そうね。此処は一応神聖な泉だから。水場はこっち。ついて来て。」

彼女は身を翻しついて来るように言い、そのままどんどん進んでいく。俺は彼女の背中を追って、片手で熊を引きずりながらついていく。

ちなみに彼女の着ている服は柔らかそうな糸で織られたシンプルなワンピースだ。色は少し薄めの黄色で暖かさを感じさせるものだ。そのワンピースと髪の間から時折ちらつく白い肌が妙な色気を持っていて危ない気分になってしまいそうだ。

……駄目だ、なにか会話でもしなければ！

「なあ、そついやまだあんたのことを聞いてなかったんだが。よければ教えてもらえるか？」

「そついえばそうだった、わね。私の名前はセイリア、セイリアって呼んで。」

「わかった、セイリア。それでセイリアは人間なのか？こんな森の

奥に女の子一人で住んでいるから違つと勝手に思っているんだが。もし人間なら謝る。」

セイリアは目を見開いてこっちを凝視してくる。

「……………それがわかつてて怖くないの？」

恐る恐るといった感じでこちらを窺ってくる。意味がわからない。なにをそんなに怯えているんだろう。

「怖いわけないだろう。自分自身が化け物みたいなものののに。それに俺は初めてセイリアを見たときは天使かと思ったし、今でもそうじゃないかと思ってる。…だから、そんなに怯えた顔をしないでくれ。なんだか悪いことしている気分になる。」

俺は自分の思っていることをそのまま言っただけだ。すると彼女の顔は暗くなって、と思えば朱くなって最終的には俯いた。

…なにかマズイことでも言っただろうか？

「お、おい、大丈夫か？…なにか気に障るようなことでも言っただけ？」

俺の言葉を聞いた彼女は首を強く横に振った。

「違うのっ！！嬉しかったの！！馬鹿っ！！……………アリガト。」

見るとセイリアはライトグリーンの綺麗な目を潤ませ、雫を数滴流していた。

彼女の言葉を聞き、その姿を見て少なからず驚いたが、彼女の涙を指で拭ってやり彼女の目を見て、優しく頭を撫でた。  
絹のように細くサラサラとしている。

「なにがあつたかは知らないが俺でよければ話を聞く。俺の秘密も明かしたことだし。こんな所で会ったのもなにかの縁だ。腹を割ってお互いのことを話そうぜ。」

「……………うん、わかった。」

ようやくセイリアは笑ってくれた。花が咲いたような明るく綺麗な笑顔だ。

「でもそのまえに、私は天使じゃなくて妖精だから。覚えておいてね。」

彼女の正体 其の一（後書き）

はい、すいません、其の二に続きます。

## 彼女の正体 其の二（前書き）

大して書いてないくせに久しぶりの投稿です。ホント、定期更新つて尊敬します。

## 彼女の正体 其の二

俺達はそのあと水場に行き、俺は熊の解体をしたものを洗い、それから体を洗いかかった。

ここの水場の水もさっきの泉と同様に澄んでいて、それにひどく冷たい。熊の処理をしていると手が真っ赤になってしまった。

このままでは凍えてしまうので、俺はさっさと体を洗ってしまおうと思って血が付いた服に手をかける。

すると大慌てで彼女は両手で顔を覆って背中をこちら側へ向けた。

「ぬぬぬ、ぬ脱ぐなら先に言つてよ！あなたには羞恥心というものが無いの！？」

とか言いつつチラチラとこちらを盗み見している。……妖精は異性の体に興味津々なのだろうか？それともそういうお年頃なんだろうか？……それともセイリアが………まあいいか。

「今度は下まで脱ぐから、な？まあ見たいのなら構わないが。」

「そんなわけないでしょ！なに言つてんによよ！」

「噛んでるぞ。」

「~~~~~っ、バカッ！変態ッ！」

そう怒鳴ると彼女は向こうへ行ってしまった。……よし、今のうちに体を洗っておこう。



体の芯まで凍えてしまった俺は体全体をブルブルと震わせながらセイリアが行ったと思われるほうへ足を運んでいた。俺は現在着替えの服なんかは当然持っていないので、血の色と匂いを丁寧に落としたびしょ濡れの服を着ている。それがまた一段と体を冷やしていて、血のついたままのほうが良かったかもしれないと早くも後悔をしている。なので、セイリアに機嫌を直してもらい服の代わりがもしあればそれを貸してもらうため、ない場合でもとりあえず今彼女に嫌われては非常に困るので、最低でも機嫌を直してもらうために彼女の後を追っているわけだ。

そんな風に画策しているうちに彼女の背中が見えてきた。木の幹に背中を預けてひざを抱えて座っている。こちらからは表情は窺えないが、さっきの様子だときつとまだ怒って眉間に皺でも寄せているだろう。とりあえず機嫌を直してもらわないといけない。ここは素直にからかったことを詫びることにしよう。どうせ俺には上手い嘘なんてつくことはできない。

呼吸を整えてセイリアに話しかける。

「セイリア、さっきはすまなかった。少しからかおうと思ったただけだったんだ。セイリアがそんなに怒るとは思わなくて……………久しぶりにまともに会話できて嬉しかったんだ。」

そうだ、俺は久しぶりに嫌な思いをせず対等に会話出来たことが嬉しくて調子に乗っていたんだ。化物みたいな俺の正体を知っても俺を蔑んだりすることなく扱ってくれて、彼女なら大丈夫かもしれないと思ってしまうんだ。化物のくせに。

「そんなに怒ってないわよ。だから一々深刻そうな顔をしないでくれる？　なんだか私が悪いことをしたみたいだわ。」

彼女は呆れたような表情をした後、悪戯っぽく笑ってウインクを飛ばしてきた。それは、俺がウジウジと悩んでいたものなんて一瞬で粉々に破壊した。いや、してくれた。今まで悩んできたことが馬鹿馬鹿しくおもえるほどに。……俺は救われたのだ。ココロが軽く体を縛っていた鎖が少し切れた感じがした。このことは一生忘れることはないだろう。

「って、服がびしょびしょじゃない！　なんで着替えが無いって言わなかったのよ！」

「言う前にセイリアが逃げていったんだろ。」

救われた恩はひとまず置いておいて冷静に突っ込む。すると、むぐ、と頬を膨らませたセイリアは何かをぐちぐち呟いた後、まあいいわと言って俺に提案してくる。

「向こうの小屋に毛布が一つあるわ。それを巻いて火に当たりましたよう。」

俺には反対する理由などないのでそれを了承し、今度は小屋に向かって歩き出す。

……どうでもいいが今日はやけに連れられて歩いている気がする。しかしそれも何処となく心地いいもので悪い気はしなかった。

## 彼女の正体 其の二（後書き）

全然正体について触れませんでしたねすみません。次はたぶん大丈夫、のはず。

## 彼女の正体 其の三（前書き）

そつえば前回から書き方を少し変えてみました。これからあんな感じでやっいていこうと思っています。

### 彼女の正体 其の三

着いてみると、まあ随分と立派な小屋ですねと皮肉の一つも言いたくなくなった。小屋というのは一般的にこじんまりとしていて人が一人暮らすのがやっとな感じの建物ではないのだろうか。それを言い過ぎだとしても、断じてこれは小屋ではないと言い切れる。なぜなら

.....

「.....でかい。なんだこれは。」

そう、そこに建っていたのは二階建ての少し年季を感じさせる屋敷だったのだ。俺のいた村の村長の家も俺からすればかなりの大きさの家だったが、この屋敷は規模が違う。ざっと見たところ横の長さも縦の長さも50メートル以上、高さも10メートルはあるんじゃないだろうか。

「まあね。でも小屋は小屋でしょう?」

「いや、こういうのは屋敷って呼ぶんじゃないか?」

…きつとセイリアは言葉をよく知らないんだろう。妖精って言うてたしな。その証拠に彼女は白い顔を青くさせて、そうだったの!?!とか小声で言うて戦慄している。彼女に掛かれば城とかいう天を衝くように大きな建物すら小屋になってしまいそうだ。見たことはないので大きさまではわからないが。

「まあそんなこと知ってたけど。ちょっとあなたの学力を試しただけよ。」

しかしセイリアはこめかみに冷や汗をかきながら今更のように取り繕ってくる。本当にごまかすことが出来ると思っっているのかは判らないが、大人びた感じのセイリアがそんなふうに慌てて取り繕う姿を見ると頬が緩んでしまう。

「……………何笑ってるの？早く入るわよ。」

頬が緩んでいるのがバレたのか若干不機嫌そうにこちらを軽く睨んでくる。俺もいい加減寒くて死にそうなのですぐに詫びて屋敷の中に入ることにした。

俺は屋敷の中を進んでいきいくつもある部屋のうちの一つに通された。部屋の中には簡素な机と椅子、それに暖炉があるだけの質素な部屋だ。大きめの窓から柔らかい日差しが差し込んできて部屋の中は割りと明るい。セイリアは毛布を取ってくるといつて部屋から出て行った。俺は彼女が部屋から出て行くと、さっき彼女が火をつけてくれた暖炉の前に急いで座り込み暖をとっている。急に暖かくなつたので思わず体がぶるつと震えたが、すぐに慣れて今は熱が体に染み込んできて心地よい。火がありがたくて涙が出てきそうだ。

……………そういえば羽も服同様にびしょ濡れだ。鳥と同じような羽だが、俺の羽の毛はもふもふしているので幾分か水分を吸収しやすい。そのため、雨が降っているときは飛ぶととても疲れるのだ。

というわけで羽を乾かそうと思った俺は、上に着ていたボロボロで冷たい服を脱ぎ、背中を暖炉に向ける。そして羽を１メートル強ほど伸ばして内側へ反るようにして暖炉の熱を余すところ無く活用しようとする。これがなかなか上手いき、羽全体に熱が伝わり徐々に羽が乾いていく。

そうしていると部屋の扉が開けられセイリアが顔を覗かせる。と、

「何であなたはいつも服を脱いでいるのよ!」

またもや顔を林檎みたいに真っ赤にして叫んだ。

「ああ、ちよつと羽を乾かしたくてつい……。」

「ついじゃないっ!……はあ、いいわもつ。私が慣れればいいんでしょう。」

そういうとどこか諦めたような雰囲気を漂わせながら非難がましい目で俺を見てくる。セイリアが意識しすぎなんじゃないかと思つたがおくびにも出さない。

彼女は俺に毛布を手渡しして俺の横に足を崩して座ってくる。距離的には10センチぐらい。忘れられているかもしれないが、彼女は空前絶後の絶世の美女なのだ。俺の鼓動は速さを増して少し胸が苦しくなる。

そんな俺の気も知らないでセイリアは上目遣いにこちらを見て、柔らかに瑞々しい唇を使つて言葉を紡ぐ。

「それで、……私の話も、聞いてくれるのよね?」

期待と不安が入り混じつた顔で言われセイリアは俺の話を聞いていなかったのかと少し落ち込んだが、俺も似たようなものだと思ひ納得する。だから、その不安を消し去つて安心させるために俺は笑つて答える。

「勿論だ。約束だしな。」

「……そうだったわね。うん、ありがとう。」

心拍数が跳ね上がるような笑顔をこちら向けてくる彼女に、俺は動揺が顔の出ないように先を促す。

「まず私は人間からは精霊と呼ばれている存在で、この森を守護している精霊よ。でも私は妖精って言われるほうが好きだから妖精だといっているわ。まあ、妖精も精霊も呼び方が違うだけでどっちも同じ存在だからあまり意味は無いんだけど。それで主な仕事はこの森の環境を、動植物の生活の営みを護り、それを犯すものを遠ざけることよ。基本的には結界を張って森の奥には入らせないようにしているわ。この結界は外からの侵入者を方向感覚を狂わせて森の外に追い出すという性質があつて奥には入ってこられないはずなんだけど……………」

そう言葉を区切った彼女はこちらに視線を訝しげな向けてくる。そんな目で見られても俺にもさっぱりわからないので説明のしようがない。なので肩をすくめてわからないという趣旨をセイリアに伝える。

セイリアはため息をついて話を続ける。



彼女の正体 其の三（後書き）

深刻な話はこの後です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1649z/>

---

白黒逃避行

2011年12月19日08時58分発行